

編集後記

- 毎号、締切りの一か月余前に原稿依頼をする。多忙でそれどころではない方、もともと作文が嫌いな方、事情は色々であろうから、執筆の諾否を一週間以内に回答するようにお願いしている。でないと、締切りまで待って入稿されなかったら慌てることになる。ところが諾否の回答が頂けない。そこで葉書で回答を督促することになるが、それでも知らぬ顔の半兵衛を決め込む方が多い。原稿を書くか書かないかはご自由である。しかし、依頼に回答だけはして欲しい。
- 全国大会で歴史的な結果を残して欲しい。毎年の戦績を見ながら毎回のこの思いは、全OBに共通する。それを実現するべく努力を惜しまず指導にあたってくれている指導スタッフには頭が下がる。敬意を表した上で敢えて物申すとするならば、前年の部活全体を分析して、“ここをこう変えると良くなるという点を洗い出して、翌年に実施する”という改善が感じられないのが残念である。これでは、昨年打ち出された「競技パイロット育成指針」も画餅となりかねない。昨年と同じ流れで、他校と同じことを繰り返しては“Breakthrough”はあり得ない。それとも、「これ以上は改善の余地が無い」というので現状に満足しているのであれば、そう言ってほしい。過大な期待をしないようにするので。
- 「現役時代に部活で苦労したことを書いて欲しい」と12名の翔友に原稿依頼した結果、6名の方が応じて下さった。皆さんに共通しているのは、苦しかったことは忘れるか、楽しい思い出に変わっていることである。大学時代のクラブ活動の不思議な力であり、貴重な時間と経験である。
- 「鶉野」について、深い思い出をお持ちの二人の翔友から、昨年号を発行した直後に投稿があった。そこで、著者のタイトルを編集長の独断で「鶉野慕情 1,2」と変更して掲載した。鶉野の経緯については、翔友VI掲載の“滑空場物語”の中で、樺島紳一郎氏による「鶉野の発見」に詳述されている。この機会に再読して頂きたい。当時の同志社と、関西の練習場の様子が良く分かる。鶉野には編集長にも深い思い入れがあるので、一度「鶉野特集」を組んでみたいと思わないでもないが、この地に共通認識を持っているのは5~6年の間のOBだけであるので、それも憚れることである。それにしても、白石美寿彥さんの文中、—“私にとっての「航空部」は、残念ながら空を舞うなんて夢のまた夢。ずーと地上を走っていました。”—はご謙遜である。全合宿に参加され、技量は極めて優秀、「実に滑らかな舵を使った」ことを後席で見続けていた編集長はよく覚えている…。
- 異常気象が「異常」でも無くなってきたここ数年、皆さんお大事に。

翔友 30	〈非売品〉	編集	翔友会
2015年6月1日		発行	同志社大学体育会航空部
		印刷	同志社大学プリントステーション
